

# 中国青島市における観光スポットの言語景観について

劉 潔<sup>1)</sup>・大橋 眞<sup>2)</sup>・岸江信介<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>青島理工大学外国語学院・<sup>2)</sup>徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部

## Linguistic landscapes of the famous tourist spots of Qingdao city in China

Jie Liu<sup>1)\*</sup>, Makoto Owhashi<sup>2)</sup> and Shinsuke Kishie<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>Qingdao University of Science & Technology, <sup>2)</sup>The University of Tokushima

### Abstract

Globalization trends will affect the linguistic landscape of the traveling spots in the world-wide. In the present study, we surveyed the change of the linguistic landscape of famous tourist spots of Qingdao city where the architectures are affected by foreign culture in the colonial period of Germany or Japan. We also surveyed modern architectures and instruments in Qingdao city established in the Olympics Games in Beijing City. The results indicated that some of the signs are written in Germany in parallel with Chinese in the German style street. In contrast, most of the signs in Beer museum are shown by multiple languages including Japanese and Korean probably reflecting the number of tourist visiting this museum. On the other hand, major part of the signs of street around the beer museum were written in Chinese only, probably those signs along the street are not considered to contribute to motivate the tourist for shopping at present. Thus, the linguistic landscapes of those tourist spots likely reflect the perspective purpose and linguistic ability of the visitor to the tourist spot.

Key word (globalization, linguistic landscape, Qingdao city, China, tourist spot)

### 1. 緒言

グローバル化の時代を迎えて、世界の都市景観にも変化が見られる。特に言語表記に関して、自国の言語の表記だけでなく、様々な工夫がされた表記物が増えてきている。この背景には、経済活動の活性化に伴う人の移動がある。この国を超えて移動する人の中には、現地の言語を十分に理解できない人も多い。とりわけ、海外に観光を主な目的として移動する観光客は、現地の言語を十

分に習得していない割合が高い。観光客の誘致が経済的な効果を及ぼすことから、このような言語を十分に習得していない観光客をさらに呼び込むために、様々な工夫をするようになってきた。さらに観光客だけではなく、ビジネス、文化活動などの目的で滞在する人にも、現地の言語を十分に理解しなくても、消費活動を行いやすい環境を整備することで、より多くの消費を促すという効果も期待できる。このように、渡航の目的は多彩であるが、経済活動との密接な関係に基づいて現地を訪れる人が増え、その中には現地の言葉の理

---

Jie Liu<[luciajie123@gmail.com](mailto:luciajie123@gmail.com)>

解が十分でない人も多くなってきたために、このような人に対する配慮が必要になってきたと言えよう。

近年の中国経済のグローバル化は、国家政策としての市場開放の推進をはじめとして、国際経済システムへの積極的な参加などのように、様々な中国経済の発展と密接に関係している。青島市においても、経済発展による外国人の増加が著しく、経済開放区に指定された1985年より次第に顕著になってきている。中国では、国家主導でのプロジェクトとして、特定の地域を優先させて経済の国際化を進めてきたという面があり、特区に指定された同市黄島区の青島経済技術開発区では新興の工業地帯として発展してきており、大学移転などを含めて、消費人口の増加が著しい。この消費人口の増加を見込んで、スーパーマーケットの新規開店が相次ぎ、同市の商業・文化の拠点として発展しつつある。このような新興の商業施設では、政策的に多言語の表記を行っており、前回の調査では、この黄島区に隣接して立地しているスーパーマーケット4店舗の案内板の言語表記について調べた。その結果として、特に外国資本による商業施設では、多言語表記が進んでいることが判った。

今回の調査では、調査対象を青島市の代表的な観光施設や観光地として、前回の調査対象である商業施設との違いを調べることにした。青島の歴史は古く、各時代における要衝として発展してきた。また、ドイツや日本の植民地になったことがあり、現在もその時代の痕跡を見ることができる。とりわけ建築や観光名勝など外国文化の軌跡が見られる。ヨーロッパ風の赤い屋根の建造物が多く、他の中国の都市とは、異なった景観を見せている。この時代から製造がはじまった青島ビールは、現在では世界的な知名度があり、青島を訪れる観光客にとっては、欠くことのできないアイテムとなっている。また、これに関連する施設として、工場に併設された青島ビール博物館が有名な観光スポットになっている。また、2008年の北京オリンピック開催においては、青島市は唯一の協力都市として、ヨット競技の会場となった。会場となった海浜公園では、この時にヨット競技施設だけではなく、各国からの選手や役員、観客な

どを迎えるために、様々なインフラ整備が行われた。ヨット競技のおこなわれた地区は、現在オリンピック主題公園として一般に開放されており、国際観光都市としての施設が充実している。

今回の調査では、数多くの青島市の観光スポットの中から、「ドイツ風情街」、そして中山公園、八大関、青島オリンピックヨットセンター及び青島ビール博物館を対象として行うことにした。これらの観光施設の特徴として、「歴史の遺跡」、「現代の匂い」そして「グローバル化の絆」をそのキーワードとしてあげることができよう。

## 2. 調査内容

調査方法：青島の観光地を5つのグループに分け、ドイツ風情街、中山公園、八大関、青島オリンピックヨットセンター及び青島ビール博物館を対象に、それぞれの地域の言語表記物の写真を撮影して、これを解析した。

## 3. 結果

### 3.1 ドイツ風情街

#### 3.1.1 調査エリア

現在の「ドイツ風情街」は「館陶路」にある。1891年には、青島はドイツの植民地になった。そのため、1899年にはドイツ風の建築物が立ち並ぶ「館陶路」が建設された。そして、20世紀30年代前半まで、輸出入貿易の拡大に伴って、館陶路は「青島のウォール街」として発展した。このことにより、中国の華東地域の貿易に強い影響を与える存在になった。当時のドイツ、日本及びアメリカなどの国々は、この地区に次々と本国企業の支店を設立する風潮があり、国際都市として発展してきた。21世紀の現在においては、青島の経済はより一層の発展を遂げている。2008年の北京オリンピックを契機にして、インフラ整備を進めた結果、近代的な都市としても世界の観光客によく知られるようになった。また2009年からは、青島市政は「古い街を改造して、特色を持った街を創る」の理念を掲げて、「館陶路」の改修を推進してきた。さらに、ドイツと中国の間の絆として、毎年世界から大勢の人々を迎え入れて、「館陶路」において、様々な文化交流活動が行なわれるようになってきた。

この地区の言語表記を調べるために、主に広告看板について、どの言語が使用されているかを調査した、また、外国語（英語、ドイツ語など）の併記についても調査した。

### 3.1.2 調査結果

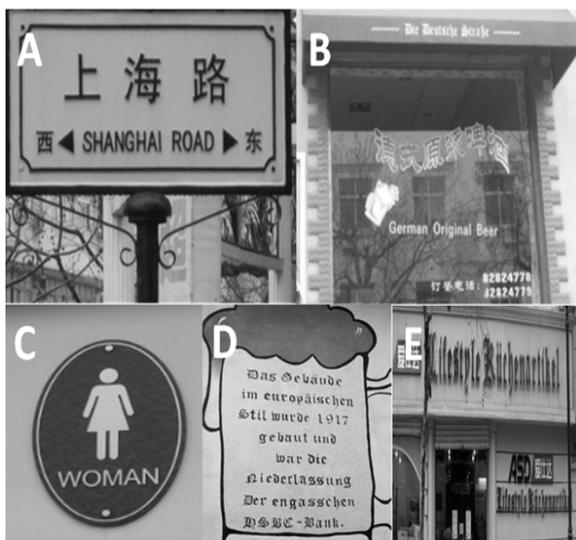


図1 ドイツ風情街の言語表記物

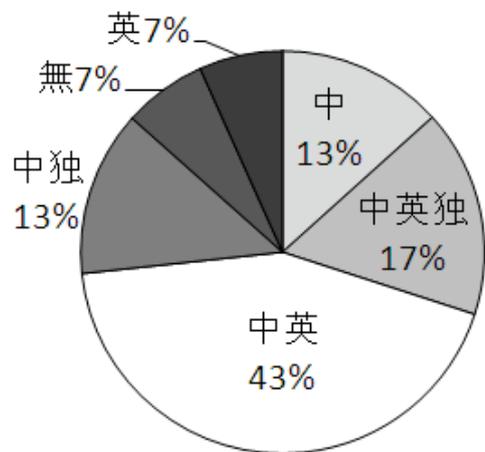


図2 ドイツ風情街における多言語表記

### 3.1.2 ドイツ風情街の多言語表記

調査結果によると、中国語と英語の両国語で表示された表記物は、全体の43.3%を占めており、最も標準的な表記法になっていることが分かった。その次に多いのが、中英独の3ヶ国語による表記であり、全体の16.7%にも達している。ま

た、中国語とドイツ語の表記が13.3%もあり、中国語単独表記の割合と同じであった。さらに、ドイツ語単独の表記や、中国語、英語、ドイツ語以外の言語表示は、この地区ではほとんど見られなかった。

「ドイツ風情街」において、街全体の言語表示は中国語と英語の両国語によるものが最も多かった。英語表記も7%近くあった。これに対して、ドイツ語単独表記は見られなかったが、中英独の3ヶ国語や中独の2ヶ国語を合計すると、30%もドイツ語の表示があることがわかった。英語の表記は、中英、中英独、英を合計すると、67%にも達している。世界での地位がますます高まり、そして外国人観光客の増加に伴い、英語での表示の必要性が浮き彫りにされていると言えよう。

また、ここ「ドイツ風情街」は青島とドイツの交友記念街として位置づけられている背景があり、30%の表記にドイツ語が使われている。青島は中国の中でも、最もドイツとの淵源がある土地であり、これをきっかけとして、ヨーロッパ風の町づくりを進めてきた。このような経緯があり、他の都市には見られないドイツ語表記の言語景観が形成されてきた。このような言語景観は、この街の特徴としてあげられよう。

## 3.2 中山公園

### 3.2.1 調査エリア

今回の調査の中に、「中山公園」を選んだ理由の一つはその歴史にある。1904年、ドイツ軍は



図3 中山公園における言語表記物

現在の中山公園である会前村を占領し、村の建物を破壊して、植物の実験場を作った。その後、1914年、日本はドイツの代わりに青島を占領した。そして、中山公園に数多くの日本的な景観を作り上げた。例えば、現在では、すっかり姿が消えてしまった「青島神社」や、現在も多くの人々を魅了している「桜林」などがあげられる。このように、中山公園は、占領国から数多くの文化影響を受けたのではないと思われる。そのために、現在でもこの地区では、ドイツ語や日本語などの言語を用いた表記物が多いのではないだろうかと予測した。しかし実際に調べて見ると、現況は予測とはかなり異なっていた。

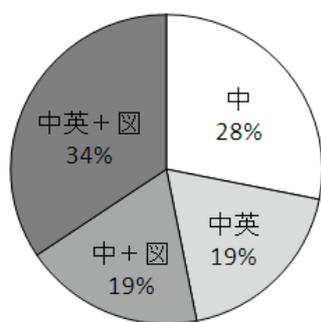


図4 中山公園における多言語表記

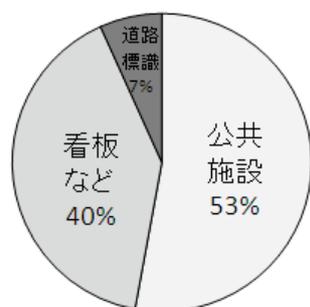


図5 中山公園における調査対象

### 3.2.2 調査結果

中山公園の言語表記は、図4に示すように、外国語の併記で使われている言語は英語のみであった。英語は、国際語として世界中で最もよく使われる言葉であり、中国においても外国語の併記では、英語が使われることが最も多い。青島においても、中国語との併記で、最もよく使われているのは英語であった。特に今回調査した中山公園では、中国語と英語が併記された表記物は全体の約6割に達していた。しかしながらその一方で、

中山公園ではドイツ、日本との歴史の関係があったにも関わらず、英語以外の外国語の表記は全く見られなかった。中山公園を訪れる外国人にとって、中国語と英語の表記だけで、十分に理解してもらえるかという問題がある。そのために、文字表示の以外に、図などを併記した表記物が非常に豊富であった。併記された図は、言語が理解できなくてもその意味を理解しやすいように工夫されており、中国語と英語の併記だけでも情報伝達ができるようになっている(図3B,E)。上記で述べたように中山公園には独特の歴史もあり、毎年花見を目的とした日本人や韓国人などが訪れるため、英語以外に日本語や韓国語などを加えた、より幅広い多国語の表記も必要であろう。このような配慮により、中山公園の国際化が、言語表記の面からも推進されると考えられる。

### 3.3 八大関

#### 3.3.1 調査エリア

八大関という名称は、歴史的な8つの有名な関所という由来により、名付けられた。かつては「万国の建築博覧会」と讃えられ、19世紀末から20世紀のはじめに、東西文化を総合的に吸収し、多種多様の建物がこの地に建築されたために、歴史的な情緒がある街並みが広がっている。青島では「赤い屋根、緑の木、透き通っている海、青い空」という街づくりで中国国内でも有名になってきている。八大関は、まさにそのようなコンセプトに基づいた街づくりの縮図といってもよいだろう。また、ここの植物のほとんどは日本から移植されたものであり、毎年たくさんの観光客がこの施設を訪問している。外国人観光客としては、特に日本人と韓国人の客が多い。こうした背景が



図6 八大関における道路名を示す標識。左：背景色は緑で東西方向の道路名を表示 右：背景色は青で南北方向の道路名を表示

表1 八大関の言語表記物の特徴

調査の分類	言葉の種類	色	字型の大小
交通案内看板	中国語と英語	青、緑	英語より中国語が大きい
観光の案内看板	中国語と英語	紫	英語より中国語が大きい
青島の旅行地図	中国語と英語	多色	英語より中国語が大きい
安全注意表示	中国語と英語	緑	英語より中国語が大きい
ゴミ箱	中国語と英語	青、黄	中国語での大きな文字と英語同じで、中国語の小さい文字がある
トイレ	文字がない	青	シンボルだけ
警戒表示	中国語と英語	赤	英語より中国語が大きい



図7 八大関の言語表記物

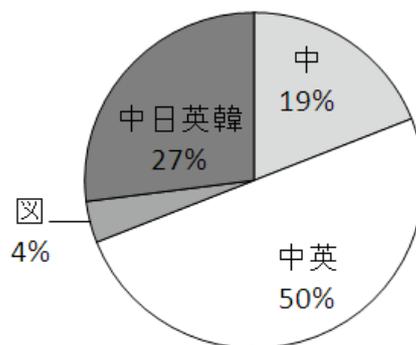


図8 八大関の表記物で使用されている言語

あるために、この観光スポットには多国籍言語での表示が多いだろうと予測し、今回の調査対象にした。

### 3.3.2 調査結果

図7の写真のように、中国語の表示は大きく、英語の上にかかれている。図がある場合には一番上に書かれていることも分かった。表示の色に関しては、道標の場合、青い色により南北を示し、緑の色により東西を示しているという一つのルールを持たせている。

八大関のように、多くの観光客が訪れる国内でも名高い観光スポットでは、わかりやすい言語表記が特に必要である。八大関は独特の歴史背景もあり、有名な観光スポットとして、外国人の訪問

もあるために多国籍言語表示が多いと予測した。現に、ここを訪れる日本人や韓国人の観光客がかなりの数に上っているが、この両国語での表示はほとんど見かけなかった。

その一方、英語を用いた表記物は多かった。これは、国際化を図るために、英語表示をすることが、政策的に重視されているのではないかと思われる。

今後、八大関の観光事業を一層発展させるために、言語表記の国際化を図らなければならないと思われる。特に、初めてここを訪れる観光客にとっては道がわかりにくい。少なくとも、主要な観光施設の方向を示すような交通案内看板を多言語表記にして、英語以外の言語での対応ができるようになることが期待される。

### 3.4 青島オリンピックヨットセンター

#### 3.4.1 調査エリア

青島オリンピックヨットセンターは青島東部新区浮山海岸にある。ここでは2008年29回オリンピックと第13回パラリンピックでヨット競技が行われた。競技の開催中は、各国スポーツ選手と役員、そして様々な観光客が青島を訪問した。そのために、この付近の案内看板の言語表記物は、多言語表記のものが多いだろうと予測された。そのために、今回はオリンピックヨットセンターに設置されている、案内看板などについての調査をおこなった。

#### 3.4.2 調査結果

1) 表記物に使用されている言語や図について、分類をして次のようにまとめた。



図9 オリンピックセンターの表記物

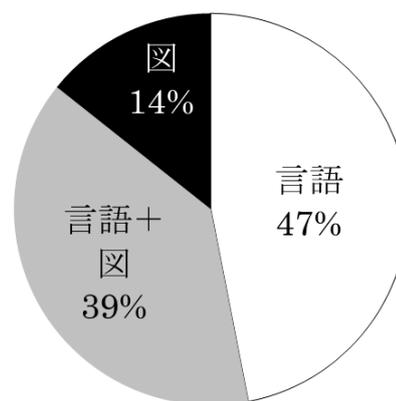


図10 オリンピックセンター表記物の言語と図の割合

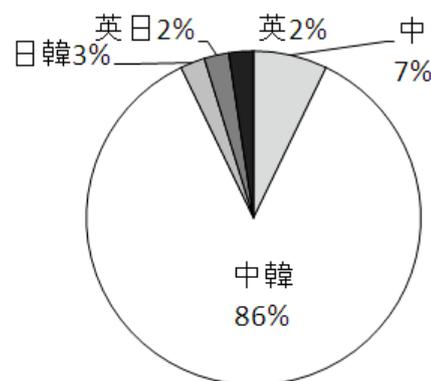


図11 オリンピックセンターの多言語表記

今回の調査結果の分析をしたところ、つぎのような3つの点をこの地区の言語景観の特徴として挙げる事ができる。

1) 言語と図を併用している表記物が多い。多国籍の人が集まる公的な場所での案内表記では、文字による表示だけでは理解できない人がいることが予測されるために、図を併用することで、その欠点を補う目的で、設置された。今日では、言語を理解できない観光客にとって、容易に情報を入手できる表記物として利用されている。

2) 使用されている言語は、中国語と英語が多い。それに比較すると、日本語と韓国語が少ない。オリンピックのような世界規模のスポーツ大会が行われる場であるオリンピックセンターは、競技の開催当時は各国の選手や役員多くの国々からの観光客も訪ねてきた所である。そのため、中国

語以外では、英語の表示が多いことは当然である。また、青島は沿海都市として、日本、韓国に隣接しており、両国との文化、教育、貿易等方面の交流も盛んに行われている。日本語や韓国語による表記もあるが（図9）、その数は英語ほどではない。

3) 図や印等のみによる表記例も多い。特に万国共通に理解できるようなデザインが取り入れられるようになったトイレの図の表示などが、その例として挙げられる。

### 3.5 青島ビール博物館

#### 3.5.1 調査エリア

「青島ビール」は、青島という地名を冠した中国の産物の中では、最も有名なものである。歴史的には、ドイツ占領時代にドイツの技術を用いて始まったビール醸造工場であるが、その後世界に広まってグローバルブランドになった。日本人をはじめ、青島を訪ねてきた国内外の観光客の多くが「青島ビール博物館」に足を運ぶことから、そのブランドの浸透力が理解できる。「青島ビール博物館」の所在地であるビール街も名高い。博物館ではビールの製造作法をはじめ、ビールの歴史なども記載されており、青島のシンボルであるビール博物館は、今回の調査において調査することにした。そこでは、青島ビール街と青島ビール博物館における看板や広告などで使用されている言語表記を調べて、他地域のそれと比較をした。

#### 3.5.2 調査結果

1) ビール街において：青島ビール博物館は青島ビール街という所に位置している。今回の調査では、博物館とその周辺のビール街の言語表記物の使用言語を調べた。

図12のとおり、中国語の使用は圧倒的に多い。「青島ビール博物館」は青島の代表的な観光施設であるために、外国語での表記が多いだろうと予測していたが、実際には多言語での表記は少なかった。英語での表記はある程度見られたが、ドイツ語の表記はなく、日本語や韓国語も少なかった。2) 青島ビール博物館において：博物館における調査では、看板などの表記物における多言語表記が多く用いられている（図13）。調査する前には、

博物館館内は館外と大体一緒だと予測したが、実際には館外では中国語のみの表記物が多かったのに比べて館内では多言語表記の看板が溢れている。ここでも多言語表記で最もよく使用されている言語は英語である。その他、日本語や韓国語などでの表示も他地域に比較すると多い。

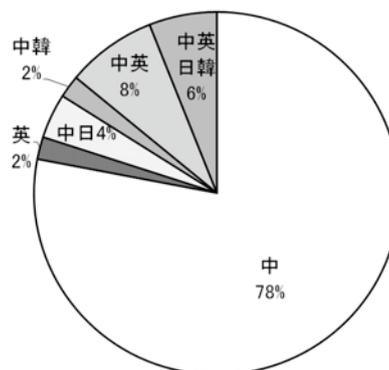


図12 青島ビール街における多言語表記

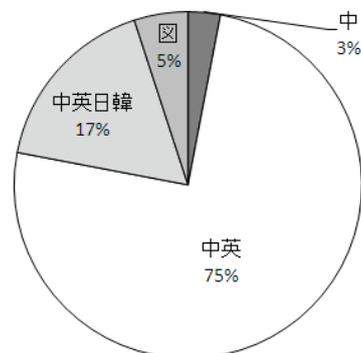


図13 青島ビール博物館における多言語表記



図14 青島ビール博物館の言語表記

ビール街では中国語単独の表記物が8割近くに達しているのに対して、中国と英語の2カ国語だけ広く使用されている。これはビール街を訪れるのがほとんど当地の中国人であるために、表記もそれに対応する形になっている。その一方で、世界でも有名な青島ビールに感心を持つ多くの外国人がビール博物館を訪れるため、館内では多言語の使用が目立つ。特に、日本人や韓国人は青島ビールに馴染み持つ人が多く、青島ビール博物館を訪問する人も増えてきている。それに応じて、看板なども日本語や韓国語を併記した多言語表示がされたものが多いと思われる。飲食文化や言語文化のような一つの国の文化が、近隣諸国に対してもお互いに影響しあう力を浮き彫りにしている。

#### 4. 考察

歴史的に見ると、イギリス、フランス、アメリカ、ドイツ、ロシア、イタリア、オーストリア及び日本が、中国各地を侵略したことがあった。とりわけ青島は、海運の要衝としての沿海都市であるために、植民地として重視された。このような背景のもとに、植民地として占領国から数多くの文化影響を受けたために、今でもその痕跡が至る所に残っている。植民地であった時代には、宗主国は大量の自国式の建築物を作り、言語表記に関しても外国語標識が取り入れられたのは当然である。このような植民活動の影響は、長年経過した現在も、経済活動だけではなく、文化活動に対しても異国の雰囲気を残している。これらの植民地としての痕跡は、現在の平和な時代においては、遺跡としての重要な役割を持っている。その中でも、建築物と名勝においては、外国語の標識や案内板なども、現在の社会にとっても文化的な意義があると思われる。今回の調査対象である三つの観光名勝は、このようにして外国の影響を受けて作られたのである。現在の外国語標識は、数多くは存在しないが、歴史上の研究だけでなく、社会の発展においても大きな役割があると考えられる。

今回の調査では、中国語表記が圧倒的に多いのは当然であるが、外国語の表記も存在していることがわかった。かつて、17年間もドイツと日本

の植民地になったたこともある青島では、現在では「ドイツ風情街」というドイツの交友を代表する場以外には、ドイツ語の表示は全くない。そして、日本語での表記も少ない。地理的に見ても、ドイツと青島の間は長い距離があり、現在では経済と文化の交流もそれほど盛んであるとは言えない。そのために、観光名所でも、わざわざドイツ語での表記は必要ないだろうという考えもあり得る。この点に関しては、日本とドイツとは異なっている。中日両国は一衣帯水の隣国関係にあり、経済も文化も密接な関係を持っている。また、現在では青島にも日系企業がたくさんあり、在住している日本人も非常に多い。こうした背景を考えると、観光名所での日本語表記を充実させる必要があると思われる。

グローバル化の現代社会においては、経済活動に伴う国を超えた人口の異動が多くなってきている。さらに海外に出かける観光客も増加している。これに伴って、多国語表記の必要性が様々な場所において高まっていることが予測される。今後、都市言語景観をどのように築き上げるのかのコンセプトを築くことが必要であり、この点に関する充実がその都市の魅力のポイントになろう。そのために、言語景観の課題が各々の都市の共通課題になると思われる。

中国の東部沿海において、現代社会の活力を持つ町としての青島の魅力をさらに高めるためには、多くの人々に簡単に分かりやすく理解してもらえらる言語表記法の開発が必要であると考えられる。

注 この研究は、青島理工大学プログラム「多国言語景観の中日実地調査の比較」の一環として実施された。

謝辞 現地調査には、青島理工大学外国語学院日本語学部 102 班張景風、牛潤華他 18 名の学生の協力を得た。ここに感謝申し上げたい。

#### 参考文献

1. 劉 潔、大橋 眞、岸江信介 中国青島市黄島地区におけるショッピングセンターの言語景観

- 徳島大学地域科学研究 1, 57-69, 2012
2. 米 麗英、岸江 信介 シャンハイの日本人居住地における言語景観 徳島大学国語国文学 (24), 138-128, 2011
  3. 米 麗英、岸江 信介 2010 年上海における言語景観について 言語文化研究 18, 165-181, 2010
  4. 井上 史雄 日本語の多言語景観:デパートと歓迎ポスター 明海日本語 14, 99-100, 2009
  5. 江 源 言語景観研究の現状について 明海日本語 14, 67-75, 2009
  6. 庄司 博史 ペート・バックハウス, フロリアン・クルマス 日本の言語景観, 三元社 2009
  7. 山下暁美 外国人集住都市の言語景観 明海大学外国語学部論集 22, 17-34, 2010